



Alcoholics
Anonymous

こちらAA 専門家の皆様へのニューズレター

〒100-8691東京都中央郵便局 私書箱916

2003年
No.12

AA日本常任理事会
広報委員会

発行所 J S O AA日本ゼネラルサービスオフィス 〒171-0014東京都豊島区池袋4-17-10土屋ビル4F
TEL(03)3590-5377 FAX(03)3590-5419



Friend of AA

栃木県立岡本台病院アルコールセンター

精神保健福祉士 岡田 正彦

1. はじめに

この度は、『こちらAA』へ執筆する機会を与えていただき、大変光栄です。AAのニューズレターなので、出来れば自らの経験に重点を置いた論旨にしていきたいと思っております。

また、最近、たまたま日本ソーシャルワーカー協会発行の『ソーシャルワーク・スーパービジョンについて考える ピア・スーパービジョンの試みをとおして』の中でも執筆する機会を与えていただき、「アルコール関連問題並びに嗜癖関連問題ソーシャルワークに於ける自己覚知の意義について 体験的スーパービジョン論」のテーマの下、自らの拙い経験を振り返り、それを言語化（活字化）する作業を実施し脱稿したばかりなので、それも踏まえて本稿を記させていただきます。

更に、私は、とちぎセルフヘルプ情報支援センター並びにとちぎアクションフォーラム実行委員会のボランティアスタッフでもありますので、それらの実践を通して感じたことや気づいたことについても触れられればと思っております。

ところで、『こちらAA』のサブタイトルに「専門家の皆様へのニューズレター」とありますが、果して「専門家の皆様」に読んでいただけるに値するかどうかわかりかねますが、自らの拙い経験と日頃考えている事柄やそれに基づく実践等を徒然なるままに記させていただければ有り難いと考えております。

尚、前述した日本ソーシャルワーカー協会発行の『ソーシャルワーク・スーパービジョンについて考える ピア・スーパービジョンの試みをとおして』を既に読まれた方は、重複する内容も多々あるかもしれませんが、御容赦下さい。

2. アルコール専門医療との出会いとそのインパクト

私が長いモラトリアムの時代を終えて、最初に就いた職が精神医学ソーシャルワーカー（以下PSWと略記）でした。主に、当時の精神分裂病（現在は統合失調症と病名変更）と診断がついた方々が私のクライアントでした。私は、クライアントの主訴に耳を傾け、クライアントの望むことは全て提供させていただくといった勢いで援助を展開してきました。クライアントが望むことが妨げられると、病院職員とも家族とも喧嘩しておりました。私が正義の味方で、クライアントの希望を阻止する者は全て悪者といった図式でした。周りからどんなにスポイルされようと、私は間違っていないという確信があり、それを貫き通しました。上述のようなことが

4年弱続いた後、職場を現在の病院に移し、私は主にアルコール依存症者御本人並びにその家族の方々をクライアントとするようになり、PSWからアルコール関連問題ソーシャルワーカー（以下ASWと略記）へと転身するに至りました。

ASWに転身してから、遅まきながら、私の今までのPSWとしての在り方が根本的に間違っていることに気づかされました。

アルコールセンターに赴任して間もなく参加させていただいたアルコール関連問題研修会では、「援助しないことが最大の援助」とか「依存性を助長するようなテングラブでは無く自立を促すようなタフラブが重要」等々、今まで私がPSWとして実践してきた事柄が戒められるような言葉の数々が並べられました。極めつけは、「プロフェッショナル・イネイプリングは援助関係を破綻させる」との参加者へのメッセージでした。

私がPSWとして実践してきた活動は、まさしく「プロフェッショナル・イネイプリング」でした。クライアントの主訴に耳を傾けるまでは善しとしても、その後の代弁、代行は援助では無く、クライアントの自立性を奪う「プロフェッショナル・イネイプリング」に他ならなかったのです。

この研修会に参加して、私はASWとして暫くソーシャルワーク実践が出来なくなってしまいました。「私が動けばクライアントの自立性を奪ってしまうのではないか？」と考えたからです。

このような状態が半年近く続いたでしょうか。そんな折、こんな私を見るに見かねてでしょうか、1ヶ月間もの長い間、アルコール専門医療のメッカ国立療養所久里浜病院をフィールドに、ASWの実習に派遣してもらえという勤務先の配慮があったのです。そこで、就職して初めて同職種（岡崎直人ASW・藤田さかえASW）の指導を仰げることになったのです。

これは厳密な意味でのスーパービジョンとは言えないかもしれませんが、私にとっては貴重な体験でした。AAでいうところの「スポンサー」を得た心強さでした。岡崎さんや藤田さんのインテーク面接や家族相談に同席させていただいたり、外来ミーティング等のグループワークにも参加させていただきました。お二人には、私にとっての将来のロールモデルとして出会うことが出来、今でも私の大きな目標となっております。

また、実習も終わりに近づいた頃、当時の久里浜病院長、河野裕明先生に直接教えを請うことが出来ました。その時、

自分のPSWとしての不甲斐なさを語り、ASWとして今後どのように活動していけば良いのか迷っている旨を質問させていただいたところ、河野先生は「現代の医学でも回復するかどうかわからないアルコール依存症だが、貴方はアルコール依存症が回復することを信じ、それを強く望みなさい」といった類の回答をいただいたことを覚えております。河野先生によれば、「それが愛の眼差しであり、ASWに必要なスタンスである」ということでした。

これは私にとって所謂「目から鱗」体験でした。私のPSWとしての実践には、クライアントの回復を信じ、それを強く望むという姿勢、即ち「愛の眼差し」が欠けていたことに気づかされました。もし私にクライアントの回復を信じ、それを強く望む姿勢が備わっていれば、手も出さず、口も出さず、クライアントに寄り添い、見護るだけで済ますことが出来ていた筈です。

このエピソードを契機に、私は、ASWとしてのアイデンティティを獲得し、職場に戻って再びソーシャルワーク実践を展開していくことが可能になったのです。

3. AAとの出会いとそのインパクト

PSWからASWに転身した当初、既述した如く、暫くソーシャルワーク実践が出来なかったことがありました。約半年間続きましたが、その間実践していた事柄が一つだけありました。それは、AAや断酒会に出席することでした。

多くのアルコール専門医療機関では、AAや断酒会等のセルフヘルプグループへの参加を重要視しておりますが、当院も例外ではありませんでした。毎日のようにセルフヘルプグループに通う入院患者さんと一緒にAAや断酒会に参加させていただきました。

そこで、初めて、AAが世界で一番最初に始められたセルフヘルプグループであることを知ったのです。

学生時代、社会福祉を専攻していたということもあり、セルフヘルプグループの存在は知ってはありましたが、歴史に触れたことは無く、仮に担当教授が触れていたとしても聞く耳を持っていなかったのかもしれない。そういう意味では、インフォメーションは仮にあったとしても、その時点ではAAと出会う準備が、まだ私の中に出来ていなかったのかもしれない。

しかし、前述の史実を知った時、私はAAの虜になりました。

まず、AAが誕生しなければ、現在でこそ様々な領域に於いて設立されている当事者団体ではありますが、これほどまでには発展しなかったと思います。そういう意味では、AAは20世紀の偉大なる遺産であるといっても過言ではないと思います。何しろ、AAがセルフヘルプグループの原点なのですから。

また、家族からも社会からもスポイルされ頼みの綱の精神科医からも匙を投げられてしまっても、自分たちの回復を信じ、家族にも社会にも精神科医にも理解してもらえないアルコール依存症でも自分たちと同じアルコール依存症者であればお互いの悩みや苦しみ或いは憤りを理解することが出来る筈と、ハイヤーパワーを信じ、仲間の回復を信じ、そして自らの霊的転換を望んでのムーブメントには、感動を禁じませんでした。

私はたまたま社会福祉を修めた後、自らの経験（九死に一生を得るという交通事故の体験）も手伝って、「生とは何か（翻っては「死」とは何かという究極的なテーマ）」という

命題を持って哲学科宗教学研究室に進学するという遠回りをしていたので、前述の段階では、社会福祉をただ専攻していた時とは違ってAAの理念（哲学と言っても差し支えないでしょうか）を受け入れる準備は出来ていたように思うのです。その為、初めて参加したAAの際も、「ミーティングハンドブック」に於ける「神」という文言にも、「ハイヤーパワー」という文言にも、実は全く抵抗を感じなかったのです。寧ろ、図々しいのですが、そこに自分の居場所を見つけることが出来たと感じたほどでした。

前述してきましたように、私の個人的な経験も手伝って、AAとの出会いは、偶然ですが、私の世界観の中では必然に値する出会いだったのです。

大袈裟に言えば、私が社会福祉を専攻したのも、九死に一生を得るような交通事故体験をしたのも、社会福祉を修めた後哲学科宗教学研究室に進学したのも、最初の就職でPSWを選択し苦い経験をしたのも、そしてその後偶然にもアルコール専門医療の場に身を置き、学生時代には夢にも思ってもみなかったASWに転身し、その後僅か数日の間にアルコール関連問題研修会に参加し、まるで自らの経験を戒められるような講師の発言を浴び、意気消沈しソーシャルワーク実践も出来なくなり、職場の配慮で国立療養所久里浜病院に長期研修に派遣していただき、岡崎さんや藤田さんに出会い将来のロールモデルを得ることが出来、河野先生に核心をついたアドバイスをいただき、所謂「目から鱗」体験をしたのも、全てAAに出会い、AAを理解する為の準備であったとさえ思えるのです。換言すれば、これらも全てハイヤーパワーの配慮と思うことさえ出来るのです。

自らの経験を引用し、長々と記してしまいましたが、記しだすと止まらなくなるほど、AAとの出会いは、私にとって斬新であり、とてもインパクトの強い出会いだったということなのです。

4. セルフヘルプグループとのコラボレーション(1) 「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」の設立について

AAと出会ってから、セルフヘルプグループの重要性を肌で感じたのと同時に、アルコールセンターに於いて私が担当させていただいている「アルコール家族ミーティング」の参加メンバーの方から、「必要な時に必要な方々へセルフヘルプグループのインフォメーションが出来ると良いですね」といった提案をいただいておりますので、日常業務の中でも常に「セルフヘルプグループの効果的なインフォメーション」の方法を模索しておりました。

また、私は、アルコール関連問題ソーシャルワークに於けるインテーク面接の場面で、いつも「AAや断酒会というセルフヘルプグループがあるのを御存知ですか？」と質問させていただいているのですが、「知らない」と答える方が結構多いという事実にも遭遇しておりましたので、「セルフヘルプグループの効果的なインフォメーション」について試行錯誤を繰り返しておりました。

そんな折、山崎茂樹先生（現白峰クリニック院長）の論文（「セルフヘルプ・クリアリングハウスと精神保健」『こころの臨床 a-la-carte』15-1・2;94-99・205-210 1996年）が目にとまり、「これだ！」と思った次第です。

丁度その前後は、大阪府、埼玉県、福岡県、兵庫県と次々とセルフヘルプ・クリアリングハウスが設立されておりましたので、「この波に乗ることが出来れば」と1999年12

月に「とちぎセルフヘルプ情報支援センター設立準備会」を結成し、「とちぎボランティアネットワーク」を通じてボランティアを募集し、忘れもしない2000年10月15日に日本で5番目のセルフヘルプ・クリアリングハウス「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」が設立され、その活動がスタートしたのです。

「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」の設立趣旨は、下記の通りです（「とちぎセルフヘルプ情報支援センター設立総会資料」より抜粋）

近年、セルフヘルプグループの重要性が認識されつつあり、至るところで、様々な「生きづらさ」からの回復・成長を目的としたセルフヘルプグループが産声を上げている。

更に、先進地域では、様々なセルフヘルプグループの情報を整理し、セルフヘルプグループを必要としている方々に適切な情報を提供したり、まだ設立されていない分野（テーマ・課題等）のセルフヘルプグループの立ち上げを援助することを主目的とした「セルフヘルプ・クリアリングハウス」が設立されている。

しかし、本県では、「セルフヘルプ・クリアリングハウス」は勿論、東京近県には存在して当たり前のセルフヘルプグループすら儘ならないのが現状である。

そこで、本県に於いても、「セルフヘルプ・クリアリングハウス」をモデルとした「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」（略称TSHC）の設立を提案したい。

また、「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」の事業内容は、下記の通りです（「とちぎセルフヘルプ情報支援センター設立総会資料」より抜粋）

県内に於ける様々なセルフヘルプグループに関する情報の把握並びに整理と、セルフヘルプグループを必要としている県民への的確なセルフヘルプグループに関する情報提供サービス。

県内に於ける様々なセルフヘルプグループの設立に関する支援並びに技術援助。

県民のセルフヘルプグループに関する教育、知識の普及・啓発事業（セルフヘルプセミナー等の開催事業）。

県内のセルフヘルプグループ間の情報交換の支援。

前述致しました「設立趣旨」と「事業内容」に基づいて、現在まで約3年間、活動を展開してまいりました。

先ず、毎月第4金曜日を定例会とし、ボランティアの方々に集まっていたいただき事業の企画・立案をしていただいております。毎月、毎月参加してくださるボランティアの皆様には本当に頭が下がります。

また、毎週土曜日には電話相談も受け付けておりまして、電話相談専門のボランティアも養成しております。

更に、セルフヘルプグループに関する知識の普及・啓発事業の重要な柱でもある「とちぎセルフヘルプセミナー」も既に6回開催しておりまして、本年7月～8月には「発達障害児の支援」をテーマに、第7回～第8回とちぎセルフヘルプセミナーを連続して開催する予定になっております。

そして、これが、今年で3周年を迎える「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」にとって重要なイベントなのですが、11月1日～2日にかけて、ハートピアきつれ川に於きまして、「第1回セルフヘルプ・クリアリングハウス全国大会」を、全国のセルフヘルプ・クリアリングハウスの仲間の皆様の御協力を得て、開催する予定になっております。

既述させていただきました通り、本県は、他の都道府県と

比べて、セルフヘルプグループやセルフヘルプ・クリアリングハウスについては後進県と言わざるを得ません（このことにつきましては、次項に於いても詳しく触れる予定です）。しかし、このままの状況に甘んじるわけにもいきませんので、他の都道府県と比べて後進県と言わざるを得ない本県ではありますが、その本県に居住する私たち「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」のボランティアスタッフが、敢えて、この事業を進めていくことで、その過程の中で地域を耕し、セルフヘルプグループの生き方や文化という種を蒔き、その芽を育てていき、大きな花を咲かせて結実することを期待して、この大きなイベントを成功させまじょうと、ボランティア同志励まし合っている次第です。

この結果は、また、何かの機会に御報告できればと、考えております。

5. セルフヘルプグループとのコラボレーション(2) 「とちぎアディクションフォーラム実行委員会」の設立と「第1回とちぎアディクションフォーラム」の実施報告について

前述いたしました「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」に於けるセルフヘルプグループとのコラボレーションとは別に、2002年3月に「とちぎアディクションフォーラム実行委員会」と称するボランティア団体が設立されました。これは、DARC女性ハウス上岡陽江施設長の提案によります。

上岡施設長は、本県出身なのですが、アディクションに悩み苦しんでいた時、栃木県に於いては回復の為の社会資源が全く見当たらず、上京して救われたという経験をお持ちで、後に東京でDARC女性ハウスを開設するのですが、最近では栃木県から入所する方々も増加しているようです。上岡施設長によれば、「東京まで出てくるのは、地元の有効な社会資源が整備されていながら」ということですが、「いきなり施設やセルフヘルプグループをといてもなかなか難しいので、先ずはアディクションフォーラムを開催して、地元の人達にアディクションについての正しい知識の普及・啓発と理解をうながすことが先決」ということで、「とちぎアディクションフォーラム実行委員会」が設立されたのです。

毎月第一土曜日にボランティアが集結し、ボランティア同志の勉強会から始まり、実際の企画・立案を手掛けていきました。

本年5月11日には、「第1回とちぎアディクションフォーラム」のプレセミナー的役割を担う「第1回とちぎアディクションセミナー」が、上岡施設長の基調講演を中心に開催されました。定員を超える80名以上の方々の参加を得ることが出来ました。

また、昨日（6月22日）は、無事「第1回とちぎアディクションフォーラム」を終了することが出来ました（この原稿は、「第1回とちぎアディクションフォーラム」を終えた翌日に、臨場感と熱い感動が残っている間に一気に書き上げようと6月23日現在記しているところです）。

内容は、既に大先輩の神奈川県「アディクションセミナー実行委員会」の活動を参考にさせていただきながら組み立ててまいりました（事前にボランティアスタッフが、下見に第14回アディクションセミナー in YOKOHAMAに参加させていただきましたので、それを基にプログラムを作成させていただきました）。即ち、午前中から午後にかけては大ホールで体験発表を中心に実施し、午後からは体験発表と平行

(4)

してモデルミーティングを幾つかの会場で行い、希望に応じてセルフヘルプグループを実際に肌で感じていただけるような企画を実施させていただきました。

体験発表はシェアリングの連続とも言うべきもので、司会したボランティアスタッフの方も、「涙が出そうになるのを堪えて司会をしていました」と感想を述べられていました。

午後の分科会(モデルミーティング等)も、前半と後半に分けてグループにつき90分単位で実施し、11グループの参加がございましたので、来場された皆様も興味・関心のあるグループが沢山あった為か、「どれに出ていいか迷うほどでした」と感想を述べられていました。

協力して下さったセルフヘルプグループは、体験発表、分科会(モデルミーティング等)は勿論、書籍販売や資料配付等を含めると、AAをはじめとして16グループにもものぼり、来場者は優に200名を超える勢いでした。

クロージングでは、発案者の上岡施設長より、「第1回とちぎアディクションフォーラム」開催に至までの経過と本日参加しての所感が述べられたあと、来年もまたこの栃木の地で会うことが約束されました。

上岡施設長のクロージングに際してのメッセージのあと、上岡施設長と参加して下さった来場者御自身の為に大きな拍手が会場を包み、そこに参加して下さった皆様の心までもが一体化したような感覚を得ることが出来ました。

また、フォーラムが終了したあと、今日一日を振り返ってみると「あっ」と言う間に過ぎてしまったような錯覚に陥りました。つまり、あまりにも充実した、居心地の良い時間を過ごさせていただきましたので、時間の経過が早く感じられたのだと思います。

以上は、ボランティアスタッフとして関わった私の感想でもあるので主観に基づいたものですが、来場して下さった方々からアンケートもいただいておりますので、集計結果につきましては、また別の機会でお知らせ出来ればと思います。

6. おわりに

自らの経験に基づき、前半は劇的なアルコール医療並びに

AAとの出会いとそのインパクトについて記させていただき、後半は前半の特にAAとの出会いをきっかけにセルフヘルプグループの重要性を肌で感じ、様々なセルフヘルプグループとのコラボレーションを「とちぎセルフヘルプ情報支援センター」並びに「とちぎアディクションフォーラム実行委員会」を通じて実践させていただいたことを記させていただきました。

経験が全ての論旨なので、もしかしたら事実誤認、記憶の誤り、錯覚、思い込み等多々あるかもしれませんが、書き放し・読み放しということで了解していただければ幸いに存じます。

尚、最後になりましたが、これも私の記憶が正しければ、表題の“Friend of AA”は、第25回日本アルコール関連問題学会に於きまして、分科会終了後、岡崎さんと雑談している時に、前後の脈絡はもうすっかり忘れてしまいましたが、とても印象に残っている言葉で、「日本で言う『関係者』のことをアメリカでは“Friend of AA”と言うんだよ」と教えていただき、「とても良い言葉だなあ」と思っておりましたので、使用させていただきました。相手があることなので、一方的だと成立しない言葉ではありますが、個人的には「AAの友人の一人」と思い込んでおりますので、その友人の一人として自己紹介させていただいた次第です。冒頭で危惧しました通り、サブタイトルにあるような「専門家の皆様」に読んでいただけるに値する内容にはならなかったとは思いますが、「AAの友人の一人」として紙面を埋めることが出来たことは、このうえない喜びであります。どうか、今後とも宜しくお願い申し上げます。



第2回AA日本 広報&病院施設フォーラムin栃木

主催：AA日本常任理事会

テーマ「AA・回復・成長～ 関係者のAAの活用と連携について ～」

日時：2003年9月20日(土) 午前10:00～午後4:30

栃木県青年会館「コンセーレ」大ホール 〒320-0066 栃木県宇都宮市駒生1丁目1番6号 財団法人栃木県青年会館

JR宇都宮線「宇都宮駅」または「東武宇都宮駅」下車 参加費無料 当日昼食費800円(予約制)、レストランもあります。

保健医療関係者やアルコールとかかわっておられる各界のみなさんにアルコールリズムとAA(アルコールリクス・アノニマス)の回復のステップをご理解いただくためのパブリックミーティング(関係者や一般の方向け)と、全国的規模のパネルディスカッション(フォーラム=公開討論会)を計画しています

*参加申込は、電子メールでお名前・ご住所・所属連絡先・昼食(800円)希望をご記入の上 aa-jso@cam.hi-ho.ne.jp へ申し込いただくか、上記内容を送付またはFAXでお願いいたします。参加申込締切は、2003年9月10日(水)です。

*昼食(800円)の予約も受け付け、ご用意させていただきます。実費は会場にて当日お支払いください。



第4回AA日本サービスフォーラム in 福岡 「広がりのサービス」 主催：AA日本常任理事会

日時：2003年10月3～5日 場所：アクション福岡 問合せ：J S O、九州・沖縄セントラルオフィス

AAのサービスについて、全国の様々な経験の分かち合いをいたします。このフォーラムの中で、それぞれのメンバーが自分のできることやそれ以外の方法の活用でAAの目的を追求する集まりです。

J S Oの業務時間 月～金、最終連続土・日(それ以外の土・日・祝 休み) 10時～18時

関係する機関などで、この「専門家の皆様へのニューズレター」が届いていない場合は、どうぞ送付先をご連絡下さい。

URL <http://www.cam.hi-ho.ne.jp/aa-jso/>

e-mail aa-jso@cam.hi-ho.ne.jp